きぼうの虹
KIBO NO NIJI

発行所
北海道大学生活協同組合
札幌市北区北8条西7丁目
教職員委員会編集
電話 011-746-6218

留学生 Welcome Party

教職員写真同好会　中谷慎志

来たばかりの留学生へ北大についてのクイズを出題しました。
今年の春から秋にかけて来日した留学生は約1,000人にのぼります。彼らがこのキャンパスで良い出会いにあふれることを期待します。

主な記事紹介

三面　シリーズ「つくる！サステイナブルキャンパス提案プロジェクト」Vol. 5　北海道大学大学院教育学研究院　渡邊　誠
六面　こころの健康を考える㊸ 性愛について話すことのむずかしさ　北海道大学総合博物館　在田　一則
七面　博物館へ行こうⅡ　第4回

Opinion!

改めて奨学金問題を考える

大学院教育学研究院
教育福祉論
鳥　山　まどか

北海道大学生活協同組合による、「第51回学生生活実態調査」（2015年）によると、奨学金を利用している学生（回答者）の割合は32.4%で、28.4%の学生が日本学生支援機構の奨学金を利用しています。主に、食費や住居費などの生活費、授業料などの大学納付金に充てるために奨学金を利用しているという結果も得られています。

現在、4割近くの大学生が日本学生支援機構の奨学金を利用しています（日本学生支援機構「JASSO年報（平成26年度）」）。うち、4分の1強が有利子である第2種奨学金の利用です（なお、専修学校では、4割の学生が日本学生支援機構の奨学金を利用しており、そのうちの4分の3が第2種奨学金の利用となっています）。

私の研究室ではこれまで、北海道内のひとり親世帯を対象としたアンケート調査を実施していますが、「自分の奨学金を返済している」という世帯が出てくるようになってきました。ひとり親世帯の多くが、非正規雇用で年収200万円に満たない中で子育てをしています。子どもの現在とこれからの教育費をねん出しつつ、同時に、自分自身の教育費も「返済」という形で負担する世帯は今後さらに増加すると考えられます。

ここで、日本学生支援機構奨学金の制度的な変化を簡単に振り返ってみたいと思います。1984年に第2種奨学金制度がつくられました。この第2種奨学金は、1999年に財政投融資金を財源とした「きぼう21プラン」となり、これ以降、有利子奨学金の拡大が続いてきました。2000年代に入ってからは、返済金の回収強化策がはかられます。2004年に機関保証制度が導入され、2005年に債権回収業者への委託が行われました。また、2008年に全国銀行個人信用情報センターへの加盟、2009年に個人信用情報の取り扱いに関する同意条項への同意が奨学金利用の要件とされました。これにより、3か月以上の延滞をすると「ブラックリストに載る」（個人信用情報機関に延滞情報が登録される）という対応がなされるようになりました。日本の場合、「奨学金」といってもその中心は「貸与型」のものであり、「奨学金は借金である」という認識は広く国民に共有されるようになってきましたが、このように振り返ってみると、「奨学金のローン化」がますます進行してきたことが分かります。

一方で、奨学金の返済が困難な人が増加していることも社会問題となり、所得連動返還型無利子奨学金制度の導入や、返還期限猶予制度の適用年数の延長などの対応もなされています。ただし、返済の全額または一部を免除する制度にはなっていないのが現状です。

奨学金をめぐるこうした現状に対し、現在は、どちらかといえば、「将来の返済を見据えて計画的に借りる」というような、自己防衛的な対応が促されることが多いように思います。しかしながら、「教育」は個人に帰する私的なものであると同時に、社会全体に益をもたらす公共性の高いものです。公共性の高いものの費用負担を個人に求めるあり方―例えば、そもそもの授業料が高いという問題―についても考える必要があります。奨学金返済の負担を緩和するいくつかの対応策や、最近の給付奨学金創設の議論などは、当事者運動の力によるところが大きいものです。奨学金問題、教育費問題を私的な事柄にとどめない議論を続けることが重要です。

拡大教職員委員会報告

10月25日の午後６時半から、拡大教職員委員会を開催しました。

今回は北大生協の４つの委員会（学生、院生、留学生、教職員）メンバーによる意見交換を目指したため、開催時期を夏休み終了後に設定しました。

当日の参加者は、各委員会および理事会から、学部学生15名、大学院生２名、教職員３名、生協職員６名、計26名の参加を得ました。また、学部学生の内10名が１年生だったため、フレッシュな意見をたくさん聞けたことが収穫です。

今回のテーマは次の２点でした。

1．中央厚生会館の施設改善について、どのような方法や手段で学内合意を形成して行くか。

2．４つの組織委員会が合同で開催できる全学的なイベントについて。

ひとつ目のテーマでは、これまで生協内や大学との連携で行ってきた活動などのおさらい（１年生が多いので）をイントロとして、中央厚生会館だけでなく北大の厚生施設全般について、参加者が感じていることを出し合う形で話を進めました。特に１年生の参加者には全員に北大の厚生施設の印象を述べてもらいましたが、どうも皆さん「平均以下」の印象を持たれているようでした。このテーマで全体を通して出された主な意見は次のとおりです。

・Ｎ大学の食堂施設と比較して、ヒトの流れがよくない。専用チャージ機を設置しては？

・他区大学と比較してキャンパスの規模が大きいので、施設が分散している。

・Ｓ大学やＯ大学に行った事がある。厚生施設はキレイで規模も大きい。北大は学内の人数の割には施設が小さくてショボいと思う。

・北部食堂は食事以外にもゆっくりできるが、ほかの食堂はゆっくりできない。

・学生向けの施設（サークル会館含め）はどこも古臭くって、狭苦しい感じ。

・関東近辺の大学は、私立国公立大含め北大と比べて学生向け施設が充実している。北大は道内出身高校の比率が高いこともあり、黙っていても学生は来るという意識が根底にあるのではないか。

特筆すべきは、「学生は、色々考えて提案しても自分の在学中に実現できないのでモチベーションは低い。〝後輩のために〟という視点が必要。」との意見で、なるほどと思いました。このテーマについては、今後、各階層の総代会議等で意見を集めることにしました。

二つ目のテーマについては、「音楽祭、餅つき大会、オープンキャンパス時にイベント、ホームカミングデーでイベント、廃油利用のろうそく作り（キャンドルナイト・雪明りの道）、父兄参加のイベント、留学生と交流、メインストリートを使ってギネスに挑戦、お祭り屋台、プロジェクションマッピング、ホワイトイルミネーション、初音ミクの会社とコラボ」など、様々なアイディアが出されました。「北大ってみんなで楽しめるイベントが少ないよね」という共通認識が確認できました。まずは、イベント実現に向けてのプロジェクトチームを作るところから始めることになりそうです。時間はかかるかもしれませんが、ひとつでも実現できたらいいなと思います。

どちらのテーマも、今後、それぞれの委員会内で取り組みへの検討をしなければなりませんが、生協理事会からの要請ではなく委員会の主体的な活動として進めていくことができればと考えています。

いじわるじいさん

精進川という抹香くさい名の川が、札幌の住宅地の中を流れている。我が家に近く夏によく通った。国道453号線は精進橋脇、コンクリート丸太で土止めした階段があり、林に踏み込むように下りると川だ▼10月、鱒遡上の噂を聞き行ってみた。自転車を置いて釣りをしている少年がいた。向かいの岸では子供達が騒いでいた。魚を見ての騒ぎだ。一人が掴（つか）んで持ち上げたのは、白くなった死んだ鱒だった▼落ち葉の散らばる草むらを踏み、下流へと歩いた。川面のきらめきとせせらぎが思いのほか優しい。魚は動きの静かな赤い鱒を１尾見ただけ。川底がきれいな産卵床跡は随所にあったが、産卵には出会えなかった▼昔はコンクリートで護岸され、生活排水で汚れた川だったという。20数年前に一部、自然に戻すべく行政の手が入った。市民が植樹も稚魚放流もした。結果、川に魚が戻り、子供たちが来て遊び、鬱蒼とした雑木林をリスが走る▼この数年、変わるといえば物騒なことばかりのこの国で、精進川のこのような変化を見続けられるのは嬉しい驚きだ。ところでこの川、魚釣り禁止である。自転車の少年はあの掲示に気づいただろうか。（今日子）

シリーズ「つくる！サステイナブルキャンパス提案プロジェクト」Vol.5

～学生主体の活動の課題と展望～

大学院教育学院修士2年
大村 龍之介

このシリーズも今号で5回目を迎えました。残すところ2回ですが、今回はプロジェクトを行ったということがどのようなことを意味したのか記しておきたいと思います。

どのようなプロジェクトであったか

今回のプロジェクトは老朽化が進み、環境と利用者の双方に対して負荷が大きくなっていた中央食堂のあり方について、集団的な議論ができていない現状の改善のためのワークショップを行うことを目標にして取り組んできました。

少なくとも生協のしかも学生団体が主体となってこのような取組みをしたことはなく、学内での議論の火付け役になったようです。

ワークショップ自体は昨年の十二月に実施し、学生・職員合わせて参加者は少数でしたが、むしろ少人数であるからこそ、今後の議論の方向性を含めて検討できました。その後、大学や生協で中央食堂のあり方について何らかの形で取り上げられることが多くなりました。

学生主体の名の下で

繰り返しにはなりますが、今回のプロジェクトは学生が企画を進めたという点に特徴があります。しかし、組織的には前例のない議題なだけにどう進めればいいか非常に苦慮した思いがあります。

というのも、学生がやってみたいイベントを企画するのであればまだしも、中央食堂というのは現実に存在する建物であり、しかも大学や生協および関係する諸団体など多方面の利害（立場）が絡んでくる非常に〝やっかいな〟建物であります。むしろ、こういった性格の建物であるからこそ、これまで手を加えられることが控えられてきたとも言えます。

もちろん、学生の思いを重視して、現実可能かどうかは別として、議論を進めていくということはできます。しかし、学生の自主性というのはやりたいことをやれる場で発揮されるものであると同時に、その行動が現実の施策に反映されるかどうかという点にもかかってきます。高校生とは違い、各自の専門分野を持ち、思想的なバックグランドが形成されつつある学生の自主性というのは塩梅が難しいと思います。

学生の主体性が発揮されにくい背景

学生が今回のプロジェクトにどのようにコミットメントしていたか、このこと自体は活動の課題ではないように、一見思います。しかし、どうでしょうか。ワークショップへの参加者が少なかったことの理由を広報のあり方に求めたり、あるいはプロジェクトメンバーを集め、維持することの難しさを個人の資質や選任のセンスに委ねることもできるかもしれません。

しかし、理由はもう少し根深いところにあるのかもしれません。北大生にとって、施設のあり方について考えるということは文化にはなっていないのではないか、はたまた文化として根付くのは相当な期間と執念が必要なのではないかと。北大は日本でも有数のマンモス大学であり、かつ札幌圏外からの入学者が多いため、「自分たちの何か」について議論することが難しいように思います。また皮肉にも札幌駅に近いため、魅力的な飲食店が多く、また生活自体が立ち行かない程の「苦学生」の割合は相対的に減少し、なおさら「自分たちの何か」（まさに自分たちの生活を支える施設）について考えることの優先順位は低くなっているのではないでしょうか。近年では、スマホやSNSが普及し、ゆったりとした思索の中で自己と他者について考える時間は減少しています。

今後の展望

私は北大でこういった議論をすることが無理なのではないかと言うわけではありません。プロジェクトという形をとって議論を進めていくことは瞬間的に大きな力を生み、周囲の環境を変化させる力を持っています。しかし、同時に自身の生活についてゆったりと考えてみるそういった時間を作る仕掛けをつくることも必要かと思います。ワークショップに行けば意見を出すことはできます。逆に言えば、意見を出す場として強いられている場ともいえます。しかし、本当にそれが心から中央食堂に求めることなのか、自分のしてほしいことなのか、こういった思索を各自が続け自然と他者にぶつけることが、いつしか北大生の文化となるのではないでしょうか。

ワークショップ「中央食堂をプロデュース！」
グループワークの様子

キャンパス放浪記 in 函館 … 第9回

応援学～応援団・応援行為を学問へ～

～北水応援団幹部昇格合宿と船魂詣を通して～

北海道大学水産学部應援團OB 兼 応援学研究者　向井 清賢

皆様、いかがお過ごしでしょうか。函館は秋を満喫する間もなく、雪が降り、いよいよ冬が訪れようとしております。さて、私は現在、この大学を離れ、社会人として生活しているわけですが、一方で、北水応援団のみなさんとは在函のOBとして、様々な面で今もその活動を支援する（というか、勝手に遊びに伺っている）ということを今も続けています。

その中でも、つい一週間前に行われた応援団の幹部昇格合宿と船魂詣について、執筆させて頂きます。些か、読みにくい部分もあるかとは思いますが、悪しからず…。

それでは、まず、応援団の組織の特長と応援団での幹部昇格合宿から、この合宿の目的も含めて解説していきます。

応援団という組織の構造は、各大学によっても何パターンかに分けることができますが、通常、幹部と呼ばれる、組織を牽引する役割を担う上級生と、幹部候補生と呼ばれる下級生によって構成されています。

入団時には入団合宿、幹部になるためには幹部昇格合宿というものをそれぞれ行います。

ここでは、応援団とはどういう組織なのか、その精神性と、人を応援し得るだけの気力と体力、精神力の涵養、入団合宿であれば下級生として必要な応援技能の習得、幹部昇格合宿であれば、上級生として必要な応援技能の習得のほかに、過去の先達からの失敗談や成功談を通して、下級生を牽引する技術、またはそれに近いような方法論を学習、これを習得することを目的として行われます。

北水応援団では、入団時の合宿はありませんが、幹部に昇格する際の合宿はあります。

それが、11月11日から、三日間で行われました！！

内容としては、基本的な応援技能の習得をベースとして、演武の向上、エール等儀礼の完璧な技能習得、度胸をつけるための趣向も見られ、とても充実した合宿を行っていました。

特に、旗上げの鍛錬の際、前まで一人で揚げることのできなかった大団旗を掲揚する様子はまさに圧巻でした。次代は第46代になります。今後も目が離せません！！

次は、船魂詣についてです。

船魂詣とは、おしょろ丸の乗船・帰船が無事に行われるように船魂神社に御守を戴きに、必ず行き帰り、“歩いて”参詣する行事で、第36代の山東先輩の代からこの慣わしが始まったと筆者は過去の先輩から聞いております。もちろん、第43代団長であった時も、この慣わしは続いていて、私も参詣しておりました。今年は合宿と合わせて、団長の畑と次代団長予定の中尾が、寒空の下、下駄をはいて、参詣しておりました。

この慣わしについては、他大の応援団ではなかなかない風習というか、習慣のように思います。

こちらも、次代になっても続けていってほしい慣わしだと考えています。

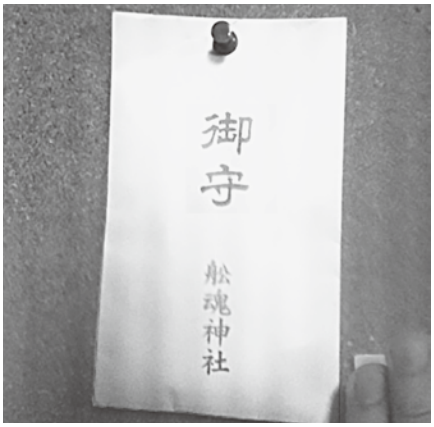
応援という行為を人類学や行動学と絡めて研究を行い、この研究分野で科研費を取れるようになってきています（国立民族博物館の丹羽氏など）。

応援という分野の研究を、様々な角度から盛んに行い、ますます現役に還元できるような材料や資料が完成してくれば、これ以上の幸せはないと考えています。

規模は微小ながら、これからも現役と手を携えながら、一歩一歩研究していくつもりです。

ご精読ありがとうございました！！

代々大切に使用されてきた太鼓と旗入れ箱



船魂詣で幹部が戴いてきた御守

幹部昇格合宿の様子

新入留学生支援『日用雑貨品無料譲渡』の取組みについて

留学生には春と秋の2回新学期があり、新入留学生の生活支援の一助としてウェルカムパーティ終了後に日用雑貨品を無料でお渡しする場を設けています。この10月14日のウェルパでも、多くのご協力をいただき、参加した留学生に喜んでいただけました。ありがとうございます。

物品は学内の教職員・学生、生協職員、地域の皆さまからの善意で持ち寄っていただいた品物を新入留学生が自由に選んで持ち帰っていただきます。みなさん「ありがとうございます」と選んだ品物を見せながらニコニコ顔で帰っていきます。

お皿1枚・マグカップ1個などご家庭で眠っている物品がございましたら毎回期間を設定して会館1階・中央店・北部店・工学部店の購買カウンターにお持ちいただくようポスター等でご協力のお願いをして、皆さまからのご支援ご協力で成り立っているイベントです。今後も継続していく予定ですのでよろしくお願いいたします。

なお、残念ながらお持ちいただいた箱や袋を開けるとお受けできないもの（壊れた家電品、汚れた衣料品、変色や油汚れのある鍋類、刃物類、ひびの入った食器）が見つかります。無料でご提供いただくのに申し訳ございませんが、可能な限り未使用のもの、使用していてもしみや黄ばみ油汚れのないもの、破損していないもののご提供をお願いいたします。

◎ お受けできるもの

- **お皿（大・中・小）、コップ、マグカップ**
  ※可能な限り未使用のものをお願いいたします
- **ハンガー、未使用のタオルなど**

× お受けできないもの

- **家電、ガス器具、家具類、刃物類、衣料品**
  ※しみや黄ばみなどの変色や油汚れのあるもの、破損品はお持込にならないようにお願い致します。

問合せ先：北大生協　留学生委員会　011-746-6218（内線3285）

「フォトコンテスト応募作品展」を開催しました。

北大生協機関紙「きぼうの虹」企画のフォトコンテストも、今年で4回目となりました。
テーマは「北大百景2016」。応募いただいた37点全作品を展示する「応募作品展」を開催しました。

11月14日（月）から11月26日（土）の2週間にわたって、北大生協会館店の1階から2階の階段壁に全応募写真37点を展示しました。昨年より総応募数は少なかったのですが、作品のクォリティーは年々上がってきています。そして何よりどの作品からも撮影者の北大への愛情を感じられます。応募されたご本人や友人をはじめ、たまたま通りがかってサラッと見ていく方、立ちどまってじっくり見ている方等、いろいろな見方で自由に見ていただきました。

また、10月31日（月）から11月30日（水）の1ヶ月間、北大正門横のエルムの森ショップでも、入賞作品6点を展示しました。こちらは観光客の方が多く来店されるので、一般の方にも鑑賞していただけました。

ただ今、生協会館店1階購買・エルムの森ショップ・ミュージアムショップにて「2017北海道大学卓上カレンダー」を販売していますが、この中に今年のフォトコンテスト入選作品から4作品を使用しています。機会がありましたら、手にとってご覧いただければと思います。

快く展示にご協力いただいた北大インフォメーションセンターの方々、応募していただいた皆さん、ご来場いただいた皆さん、本当にありがとうございました。

来年はより多くの応募を目指します。今回ご覧になった方々も是非ご応募ください。

生協会館店展示の様子

「2017北海道大学卓上カレンダー」

心とからだ健康を考える

大学院教育学研究院　准教授
渡邊　誠

こころの健康を考える㊸

性愛について話すことのむずかしさ

少年非行に関するある論文の一節の、「言えることは癒えること」という言葉が、とても印象に残っています。少年院や少年鑑別所のお世話になるような重い非行少年たちの多くが、虐待的で苛酷な環境で育っており、その経験を語れるようになることが癒しにつながり、更生には重要なのだ、といった内容でした。このようにして、他者に話せるということが、多くの場合、こころの健康にとっての一つの鍵になると言ってよいでしょう。しかし、話しづらい事柄というものもあるわけで、性愛にまつわることは、その代表的なものでありましょう。

そもそも恋ということ自体が恥ずかしい。話すのももちろん恥ずかしい。そうは思いませんか？「こころを奪われる」と言いますよね。奪われてしまって、自分の思い通りにならなくなる。そういう制御の利かない状態を、私たちはいたく恥ずかしいと思うものようです。

性愛にも、様々な水準があるでしょう。ヒトの性行動も、基本的には反射、つまり生理学的に自動的な反応で遂行可能だと言います。しかし、現実の性愛には、生理的、対人的、社会的、文化的等々のさまざまな要素が関係してきて、非常に個別性と多様性の強いものになっていると思います。性愛の関係が深まれば、どこまでが自分でどこまでが相手かわからないような状態も生じ得るわけで、これは恥ずかしいというよりも、怖いという感情が生じて不思議ではありません。自分の中の、未知の部分が出てくる怖さというものもあるでしょうか。

こう考えてみると、性愛にまつわる羞恥心にも恐怖心にも、ある部分、健康な面がありますよね。しかし羞恥や恐怖は、性愛について語ることに対して、当然さまざまな抵抗を生じさせることになります。羞恥心の方は意識することが、まあ、容易であることが多いでしょう。しかし恐怖の方は、ちょっとわかりづらいでしょうか。哲学者のジョルジュ・バタイユが、性的なものを前にした笑いはおびえている証拠であると言ったように、笑いの形で表れることが多いかもしれません。艶笑というやつですね。そして、性愛に関することは恥ずかしいものだから大っぴらに語るべきものではない、密やかに語る場合は笑いをもって包むべし、というのが、私たちの社会の暗黙の規範なのかもしれません。

性愛は、私たちの存在がそこから生じてくる源泉であるとともに、私たちの幸福、安寧、情熱に深くかかわり、それ故にと言うべきでしょうか、骨身にこたえる苦しみのもとともなります。そして、そこに支配と暴力が加われば、苛烈を極める耐え難いものともなり得ます。サド侯爵がフランス革命の混乱のさなかにバスティーユ牢獄でひそかに書き綴った未完の小説『ソドムの百二十日』は、性愛のこのまがまがしい面を極限まで追求した文学作品でしょうけれども、この残忍過酷の極北が、人間にとってただの絵空事と言い切れないところが、本当に怖ろしいことだと私は思います。

話したければどんなことでも話せる、でも、話したくないことは話さなくてまったくかまわない、これが、心理面接のルールとなり雰囲気となるのがよいと、私は考えます。性愛に関しても、そうでありたい。そして対人的支援に関わる授業についてもそうあるのが良いのではないか、と思います。性愛に関することを、これは話しちゃいけないことなんだ、と思って、胸に秘めて苦しみ続けることを助長しないような方法や雰囲気とはどんなものだろうかと思いつつ、健全な羞恥心や怖れとの難しい兼ね合いを模索しています。

普段聞くことのできない院生のなまの声を聞きました。

院生による書籍部クラーク店舗クリニック開催！

書籍部職員から「学生の目線で店舗クリニックをして、学生が売場をどうみているのか知りたい」という発案をうけて、10月18日（火）に院生委員会が「クラーク書籍店舗クリニック」を開催しました。商品構成や品ぞろえ、売り場のＰＯＰなどのプレゼンテーションについて診断し、その後懇談して本の購入動機や頻度、クラーク店の立地など意見交換しました。

〈クラーク書籍職員から一言〉

ここ数年、書籍部クラーク店の客数は伸び悩んでいます。若者の読書離れが原因なのか。それとも生協が組合員のニーズに応えられていないのか。いくら考えてもすべては仮説に過ぎませんでした。それならばと、院生の方々に店舗の中を細かく見てもらいました。「来店すれば購買意欲は高まるが、残念ながら学生がクラーク店に立ち寄る機会は少ない。」「売りたい本のアピールが足りない。」など、さまざまな組合員目線の率直な意見をいただきました。

今回の意見を聞いて、近年の客数の衰えから、生協が「組合員に与える」という点について盲目になってしまっていることを実感させられました。学生が、そして先生が「お客さん」となってしまってはいけない。改めて、組合員と一緒に創造していくことの重要性に気づかされました。

今後は、今回出していただいた意見を基に店舗の改善に努めるとともに、生協の思いが届けられるような宣伝活動を広げ、組合員にとってより身近な存在となれるような活動を何度も何度も繰り返し続けていきたいと考えています。

今回、突発的な提案にご協力いただいた院生の皆様、関係者の皆様には心から感謝申し上げます。

博物館へ 第4回 行こうII

総合博物館で開催中の「直行さんのスケッチブック」展を紹介します

北大総合博物館ボランティア　在田一則

北大総合博物館は、7月26日のリニューアルオープン以来、多くの老若男女の皆さんで賑わっていますが、最近は、現在開催している坂本直行生誕110年記念企画展示「直行さんのスケッチブック」展を目当てに来館される方々が増えています。

チョッコウさんと愛称されていた坂本直行（なおゆき）さんはもう34年も前に亡くなられましたが、力強く質量感をもった日高山脈や清々しく優しさのこもった草花の絵をご存知の方は多いと思います。

今年は、日高山脈の冬季登山パイオニアとして活躍し、南十勝で農業開拓に苦闘した山岳画家として、また『開墾の記』（1942）、『原野から見た山』（1957）、『雪原の足あと』（1965）などの著書で知られる直行さんの生誕110年にあたります。それを記念して、昨年ご遺族から北大山岳館（北大山の会）に寄贈された直行さんの膨大なスケッチブックから、道内外やヒマラヤの山々、草花の数々、そして若い時代の木版画などの展示が11月4日から始まっています。

直行さんは、蝦夷地開拓を志していたと言われる坂本龍馬（直柔）の甥である坂本直寛（自由民権運動家、キリスト教牧師、訓子府・浦臼の開拓者）の孫にあたりますが、北大在学中（北海道帝国大学農学実科）は山岳部創立部員として活躍し、卒業（1927年）の3年後に開拓者として十勝原野に入植しました。悪戦苦闘の甲斐なく30年にわたる開拓生活に挫折した直行さんは、開拓の鍬を絵筆に持ち替え、絵かきとして、学生時代や開拓の合間、そして画家の時代に登った山々や身近の草花を描き、素晴らしい作品を残しました。

今回は、寄贈されたスケッチブック136冊（2,534点）および木版画56点から120点ほどを、札幌二中～北大農学実科時代・十勝原野開拓時代・豊似アトリエ時代・手稲アトリエ時代の4つの時代に分けて展示しています。学生時代、開拓農民時代、画家の時代、それぞれの素朴で暖か味のあるスケッチはまさに直行さんの人柄を表しています。とくに今までほとんど見ることのできなかった開拓時代の作品には、厳しい開拓生活の中での自然への優しい視線を感じます。昭和初期の札幌文化に衝撃を与えたと言われる詩と創作版画の雑誌「さとぽろ」に発表した学生時代の版画には、開拓者としてのイメージとはかけ離れた大正から昭和初期のモダニズムを感じ、興味深いものです。直行さんは1946年に広尾町農村建設同盟の初代委員長となり、以後矛盾する農政との戦いに明け暮れた10年間は、登山は皆無、スケッチも少ないということです。

また、直行夫妻の人柄と生き様を慕って、1936年～65年の間、広尾の坂本宅へ685名が訪れ、589名が宿泊し、それぞれの思いを書き綴った「お宿帳」4冊も展示されています。これは貴重な資料と言えます。

会場は北大総合博物館1階の企画展示室です。展示は来年1月9日（月・祝日）までですが、12月4日（日）までの前期と12月6日（火）からの後期に分かれており、前期と後期では作品を入れ替えます。なお、すでに終了しましたが、直行さんの人物を知る方々による以下の講演会が行われました。

- **11月19日（土）** 佐藤由美加さん（北海道立近代美術館）山岳画家としての坂本直行
- **11月20日（日）** 鮫島惇一郎さん（北大山の会）直行さんと歩々の会
- **11月27日（日）** 前田由紀枝（高知県立坂本龍馬記念館）龍馬と直行

直行さんのスケッチで心が洗われたところで、リニューアルにあたって新設されたミュージアムカフェ「ポラス」で心静かにコーヒーを一杯というのはいかがでしょうか。ここにも直行さんのスケッチがあります。

企画展示の図録「直行さんのスケッチブック」（A5判、95ページ、カラー）を総合博物館ミュージアムショップで販売しております。頒価1,000円（税込）です。

木版画　静物　札幌詩学協会「さとぽろ」6号（1925年11月発行）に掲載　25×27 cm

木版画　札幌二中旅行部部報「ヌタック」2号表紙　1928年発行　30×23 cm

北大生協には「学生・院生・留学生・教職員」の４つの組織委員会があります。

北大生協組織委員会報告

学生委員会

■店舗活動「てんぽにとどけ」

生協店舗に意見を届ける手段には、組合員の声カードがあります。学生委員会では、それ以外でも、意見を届ける機会を作り、気軽に楽しみながら投稿してもらえるように、ボードを北部購買前に設置しました。いろんな意見がありましたので、見るのも楽しいものになっています。

何か意見がありましたら、ぜひ投稿してください。

■受験生・新入生向けの活動スタート

学生委員会では、現在の組合員向けだけでなく、受験生・新入生に向けた活動も行っています。この活動では、大学生協のことを知ってもらうだけでなく、受験や新生活に対する不安や疑問の解消を目指して活動していきます。北大にいる人、みんなで北大受験をする受験生や北大に合格した新入生を迎えていくために活動を行うときは、ご協力よろしくお願いします。

■学生委員会公式HP
http://hokudaigi.web.fc2.com/

■学生委員会公式Twitter
@HU_COOP_GI_CS

■学生委員会連絡先
gakusei@coop.hokudai.ac.jp

院生委員会

■書評誌「ほんでないかい2016」発行にむけ取組中！

今年の『ほんでないかい』は、例年どおり院生から投稿された書評の掲載、それと北大OB・OGによる特別インタビュー企画となっています。書評の投稿については、多彩な本を紹介するという編集コンセプトのもとで投稿を呼びかけて10月31日をもって締め切りました。ご投稿してくださった院生の皆様には感謝申し上げます。

特別インタビュー企画は、北海道大学文学部OBで、現在北海道テレビ放送（HTB）アナウンサーで番組「イチオシ！」のスポーツコーナーや「FFFF」でおなじみの谷口直樹さんにペナントレース優勝を目前にした9月27日にインタビューしました。北大進学の動機や学生時代のエピソード、HTBに入社してからの苦労話、読書のこと、ファイターズ選手のアレコレなど、いろいろ聞いちゃいました。

これから12月末発行に向け推敲及び編集作業をしています。毎年ご愛読されている方々には、もう少々お待ちください。乞うご期待です！

留学生委員会

①国際部主催『新入留学生オリエンテーション』10月4日（火）参加　午前の英語、午後の日本語両方で生協と委員会の紹介・ウエルカムパーティへのお誘いをしました。（参加者総数422人）

②『今秋新入留学生ウエルカムパーティ』10月14日（金）開催　19の国と地域から108名が参加。内64名の中国出身者は過去最高。乾杯前から料理を食べたり飲料を開封して飲む人達がいてスタッフは大焦り。日本の食文化も組合せた飲食物の全てをハラルで用意。みなさん楽しそうに次々と頬張っていました。自己紹介を兼ねたビンゴゲームで盛り上がってから生協の紹介、次いで中古自転車をもらうための説明には熱心に聞き入っていました。パーティ終了後は日用雑貨品を自由に選んで持ち帰っていただきました。（日用雑貨品提供は本誌5ページに掲載）

③『中古自転車譲渡事前説明・手続き会』10月17日（月）開催　受付開始30分前には会場の生協会館入口付近は大混雑でした。今回は、金曜夜のパーティを終え月曜夜の開催だったため、生協加入の手続きが間に合わずその場で加入される人も何人かいました。自転車事故の事例や学生賠償責任保険の紹介、防犯登録を行いました。

④『中古自転車無料譲渡会』10月23日（日）開催　寒さ厳しい屋外で2時間以上にわたる譲渡会運営は大変でしたが、諸手続きをクリアした79人は各自選んだ自転車に乗って笑顔で帰って行きました。今秋の新入留学生支援企画は、日本語や英語だけでは上手く通じない部分が多くて意思疎通の難しさを今まで以上に痛感しました。

教職員委員会

■教職員総代会議　学内7ヶ所で8月を除く毎月1回、昼休みを利用して開催しています。生協の営業報告の後、教職員の皆様に利用者の立場から色々なご意見をうかがっています。

9月は13日～15日、10月は11日～13日に開催ました。

■教職員委員会　毎月1回、18時～19時半に開催しています。総代会議で上がった組合員の声についての検討、きぼうの虹の編集・発行について討議しています。

9月は15日、10月は13日に開催しました。

■「きぼうの虹」　この冊子です。教職員委員会が編集し偶数月に発行しています。

今号には10月25日に開催した拡大教職員委員会の報告を掲載しました。一年生学生委員の声をたくさん聞けたのが収穫でした。詳しくは第二面をご覧ください。

【編集後記】　きぼうの虹367号をお届けします。

今年は秋らしい日がほとんど無く、このまま冬に突入してしまうことになりそうです。旭川など北の方では10月末に降った雪が溶けず、「根雪」の記録を更新する確率が濃厚とのこと。北海道の爽やかな秋を満喫できる期間が短かったのはとても残念です。札幌もこれから冬本番、風邪などひかぬよう気を付けましょう。

Webページ「きぼうの虹pdf版」
http://www.hokudai.seikyoune.jp/kyoushokuin/index.html

～お知らせ～　毎年北大生協で発行していました地図入りカレンダーは、今年から発行中止となりました。